羽織の表情

A Representation of HAORI Costume

横 川 公 子

元来、羽織は男装であり、小袖の上に表衣として着重ねられる着衣である。公家の束帯の袍(うえのきぬ)や狩衣、武家の直垂や大紋・素襖は、同じく男子の公式的な装束であったが、それらはすべて、表衣、つまり一番上に重ねる着衣であり、そういうところは羽織と共通している。初期には埃よけとして着られたものが、のちに様式化して、羽織袴が正式な装いとされるのは、こうした重ね着の様式に由来があるものとおもわれる。ところで羽織の着用によって、我々は公式的な意味のみならず、いろいろなニュアンスや象徴性を着重ねているようである。実際の着用の様態を見てみよう。

羽織は引っ掛けて着るために脱ぎやすく、暑さ寒さに応じて脱いだり着たりもできる、着心地調節の仕掛けとなる。かつてはふいの来客への応接や近隣への外出などに着けて、体面を保つことができる社交的着衣にもなった。さらに外出先でくつろぐ場合には脱ぐことができる。最近ではもっぱら、結婚式や成人式に紋付羽織袴で出席するというように、フォーマルな表情を演出する仕掛けになっている。というように、羽織はTPOに応じて簡単に着脱できる取り換え可能な多機能メディアとなっている。羽織は、土台となる完成形の袖着流しに、虚実にわたる余剰なもの — つまり保温や塵よけのような実用機能から、縁起かつぎや公式性、家の系譜などのシンボル・記号的な意味あいを加える仕掛けになる。そのため、あとで触れるように羽織は、その着装や形態に意味や一種の物語がまつわるものになった。

さらに実際の羽織を見てみると思いがけない展開が認められる。男羽織の一般に地味な目立たぬ色合いとは裏腹に、羽裏(=羽織の裏)には大胆な意匠を凝らした絵柄がつくことが多い。絵柄は、諺や昔話、能や狂言に取材したモチーフや、縁起を担いだもの、季節や行事に取材するものなど、物語性豊かな遊戯的趣向が尽くされていて、まるで現代の

Tシャツにプリントされたアニメーションやディズニーのキャラクター、御当地キャラクターなどが、独特な快適さや日常からのずれ感をもたらすような風である。但し、羽裏の絵柄は表には見せず、目には見えない精神的な価値や遊び心を人知れず楽しむという、内に秘めた仕掛けになっている。こうした多機能メディアとしての羽織の諸相を、服飾史の中から具体的に紹介してみよう。

羽織という着衣のおこりはあまり明らかなではない。帯を付けずにはおり着るものとしては、羽織のほか、胴服^{じつ}・十徳^{とく}・肩衣などがあり、塵よけとしては木綿の単^{ひとへ}をはおった初期の事例もある。胴服(道服とも言う)は、桃山時代の武将の遺品も多くあり、羽織の丈を長くしたような形で襦^{まろ}がない。対明貿易によってもたらされた舶載裂を16種類も接ぎ合わせた胴服(伝上杉謙信所用)や紅地雪持文様胴服(同)、桐矢襖文様辻が花胴服(伝豊臣秀吉所用)などが知られ、意匠を凝らした桃山期武家服飾の特色が表れている。

同様に戦場の武将が綺羅を飾った陣羽織を羽織のおこりとする考えもある。これは陣中で具足の上に羽織って人目を引く意匠を凝らしたものだ、江戸時代も後期になると定型化して、襟を折り返した袖なしの形に定まった。十徳は、江戸時代には医師や絵師・俳人・僧侶などの礼装であったといわれている。いずれにしても羽織の由来は定かでない。が、これらは男装であることと、はおり着ることが共通の装いであり、着る人の分際や職業をそれとして示唆し、綺羅を飾り、装いを整えるための表衣として完成されている。このような羽織型着衣の諸機能が重ねあわされて、現在の羽織の表情に反映していると見ることができる。

江戸時代になると、それまでの形も色も素材も雑多であった羽織が、袴と組み合わせられて羽織袴姿として様式化を遂げ、武士の日常着、町人の礼装となる。礼装となると色や柄が地味になり、江戸中期には黒紋付(羽二重・縮緬など)が最も正式なものとなる。と同時に無地・小紋・縞の順に略式とされ、羽織の着方に表向きの格式が重ね合わされるようになる。幕末には羽織袴姿は武士の公服となり、明治維新以後に袴が廃止されてから今日に至るまで、男子の礼装として広く用いられている。羽織は小袖着流しとも組み合わせられ、素材や色の格付けとも重なり合って、礼装から略装までの区別が行われるようになる。特に明治維新後は、着衣の禁止令が解かれ、羽織は男子の表道具として

KIMIKO YOKOGAWA

武庫川女子大学 生活環境学部 教授
〒663-8558 兵庫県西宮市池開町 6-46
武庫川女子大学 生活環境学部
Tel: 0798-45-9854 Fax: 0798-45-9854
E-mail: kimikoyo@mukogawa-u.ac.jp
〈専門〉生活美学 服飾文化学
〈趣味〉野菜作り 愛犬と遊ぶ

看板的な役割を果たす着衣として広く普及することになったのである。

まず格式が成立した江戸前期の羽織について例示してみよう。西鶴町人物三部作¹には羽織に関する記述が13ヶ所ある。それによれば羽織には3つの機能が大別できる。第一に羽織は、麻袴と並んで町人の公式の服装であり、中脇差一腰と組み合わせて町人の表道具としてなくてはならぬものであった。そのため当時隆盛を極めた越後屋(後の三越百貨店)では、急ぎの羽織の需要にたちどころに対応できることを売りものにした。物堅いことで知られた堺の商家では、1枚の羽織を一生涯使い続けるために折り目も違えずに畳んで、丁寧に保存した。羽織は町人としての社会的地位と財産が確立していることの徴であった。そのため分際相応なものには自ずと風格が備わったが、そぐわない者が着れば笑いものになったばかりでなく、元は隆盛を極めた身の没落をも示唆することになった。富裕者の大尽遊びにふさわしい姿となる一方で、遊興に身を持ち崩した者の成れの果てを語る姿にもなったのである。さらに羽織は薬師^{くすりし}の徴にもなった。たとえば時節はずれであろうと、羽織さえ着ていれば、薬師の体面が保たれたという。上質の縮緬や羽二重の羽織は、通常的生活や普通の人々の着衣とは別格の仕掛けになっていたのである。

こうした格式が出来上がる一方で、標準的な形態からはずれた羽織が次々とひねりだされ、時々の流行になった。なかでも丈の長短は、変化の焦点になった。元禄頃の短羽織、元文頃の長羽織、宝暦頃の短羽織、安永の長羽織などが伝えられている。長羽織は「いき」や「通」にも通じる着衣として、髪型などと組み合わせられて、ときどきの時勢粧を形成した。また表衣であるがゆえに、意表をついたおしゃれを尽くす仕掛けになった。

世の介初雪のあした紙子羽織に了佐極の手鑑、定家の歌切・頼政が三首物・素性法師の長歌、其他世々のうた人の筆の跡をつがせて、是を着る事身の程しらずもつたいなし。尾笏の伝七も傾城二十三人の誓紙をつぎ集め、是も羽織にして互に男ぶりをあらそひ、……

(井原西鶴「好色一代男」巻六より)

江戸期を通じて、社交と遊興の場であった遊里への出入りに、羽織は必須の着衣であった。紙子は元来防寒用の粗末で実用的な着衣であるが、一代男「世の介」は、それをやつして着るという粋な装い。しかも紙は紙でも、美術品として垂涎的であった古筆の断簡である。それを惜しげもなく継ぎ合わせて羽織にし、着倒してしまう。この大胆さは、小説のエピソードとはいえ、奇をてらうというような域を超えた破格の創造的エネルギーの発露ともいえるべき遊び心と贅沢さを備えた趣向なのである。古筆の断簡の継ぎ接ぎは、伝上杉謙信着用の舶載裂接ぎ合わせの胴服を思い起こす意匠でもあるが、西鶴がこれを知っていたとは考えにくい。しかしここには、茶の湯の仕覆や掛軸の表装に

珍重される名物裂を16種も集積して接ぎ合わせる発想に通じるものがある。また当時の男の嗜みとして、茶の湯や活花、和歌に造詣の深いことが評価されていたことも見えてくる。さらに遊里という、現実とは一線を画した、いわば遊仙窟の、豪奢で目くるめくような虚構的趣向が髣髴としてくる。

最初に羽裏(羽織の裏)に文様を施したのは、江戸後期の遊里の通人たちで、「底至り」の趣向として人気を博した。遊里に登り羽織を脱いでくつろぐとき、羽裏は遊女や帮間(太鼓持)に目ざとく評価されて話の種になった。「底至り」は、外観は何ということもなく目立たぬが、見えないところに念入りで精巧な意匠を施して金銭を掛け、しゃれ心を楽しむという日本人の美意識である。

羽裏が一般に広まったのは、明治以降のことである。前時代の憧れだった黒の無双羽織が民間の社交着として利用されるようになったのである。女装の晴れ着(長襦袢や染め帯の革)に多く使われた摺り型友禅が男羽織の羽裏に利用されるようになったのは、明治期後半だとされる。具体的なテーマやモチーフを見てみよう。

尚武の伝統を継承する鷹や獅子、蜻蛉、祝儀気分の横溢する松竹梅や鶴亀とそれらの組み合わせ、初夢や縁起を担いだ富士山や茄子、日の出、富岳三十六景等々の羽裏の定番もののほか、著名な画家の絵や世情の流行事、新しい風物、故事、奇怪な文様表現、中には春画もどきのもの等々、一種、蠱惑的な要素をもった絵柄が次々と登場する。ここには、明治期の「通」「底至り」ともいえる要素が多彩に盛り込まれている。というよりも、羽織というメディアが明治期から大正期の近代化・西洋化の受け皿として、時代の精神や憧憬、世情を濃密に表現したことがわかる。

羽裏は、一般に、背面いっぱい大きく描かれ、モチーフが明快に捉えられる。さらに裏であるがゆえに、そうした人の想いや時代の気分を大胆果敢に引き受けえたものか

①多福を掃き寄せる箕

②富士山

③よき・こと・きく

④日章旗と海軍に戦勝縁起の蜻蛉が群がる

⑤初夢祈願「一富士・二鷹・三茄子」

⑥波に髑髏文様

⑦野菜文様

もしれないと思う。

①②③④⑤は、明治30年代前半に、京都の山田芸艸堂、宮田富山堂より木版刷りで発行された着物雛型本、海外天年・津田清楓・山下光清楓らの『はながた』の中から選別・編集された陰影本からの引用である。⑥⑦は、岡重コレク

ションと呼ばれている京友禅の岡島家(株式会社岡重)の所蔵品から借用した羽裏の引用であるが、血の海に浮かぶ髑髏や伊藤若冲の「動植綵絵」よりのヒントによると思われるしやれた図柄である。

- i 井原西鶴の町人物三部作は、『日本永代蔵』『世間胸算用』『西鶴織留』を指し、西鶴の生きた貞享・元禄期の年代記風の内容を活写している。

参考文献

- 1) 栗津 潔・古井由吉：『はながた—明治の服飾文様—』マリア書房(1988).
- 2) 市田ひろみ・藤井健三：『羽裏—日本の粋と伊達岡重コレクション—』アシェット婦人画法社(2006).